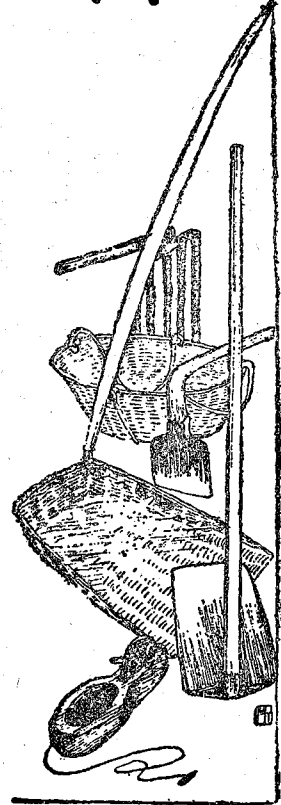


史料

東海道行脚 (七)



田中好

静岡

人口十二萬、戸數二萬四千と數へられてゐる静岡市、矢張り昔からの宿驛だった、延喜式に定められた横田驛と言ふのはこゝ静岡のことだ、東鑑は、建久元年十二月二十四

日、前右大將家、令下三向關東給、同廿四日國府。と錄してゐるから駿河國を支配する役所の在つた勢で駿河の府と言はれ國府又は府中と呼ばれたのだ、明治二年六月の觸書にも「駿州府中静岡御唱替被レ令候」とあるから府中を改めて静岡と言ふやうに爲つた、二十二年に静岡市と爲つて

以來數回に亘つて附近の部落を市域に編入して今のやうに

グレート静岡に發達したのだ、今

でこそ意張つてはゐるが駿國雜誌

が言つてるやうに、當驛家居凡百

二十三軒計り内旅籠屋四十軒本陣

と脇本陣が二家のとさもあつたの

ぢや、昔のことを洗ひ立てるとグ

レート静岡も何だか箔がはげかゝ

るやうだ、都市になればならぬ

上水道や下水道でさえも漸く近頃

になつて始めかけたやうな譯で、

氣候は天に恵まれ産物四時のもの

常に絶えないことが此處の都民を

して居眠むらしめたのだらう。

お蔭で私の旅する東海道みたい

なものは全然構つて呉れない、シーボルドの江戸參府紀行

でも、長き鄙き家屋に挟まれたる街道。と貶してゐるのも

無理はない。文治年代から天正までの東海道であつた今の

府縣道静岡千代田線の方が幅員二間

半もあつて立派だ、夫れを東海道の

復線道路だとか言つてるが、本末

顛倒とは此ことだらう併しながら靜

岡清水の交通關係はいつまでも茶切

節を歌つて遊んで居る静岡式たるを

許さない、とう／＼思ひ切つて大正

十五年にやつとのこと着手したのが

清靜開國道の改良工事だ、二里廿九

町の間を幅員十二間に擴張して近代

式道路を拵へやうと言ふのぢや、此

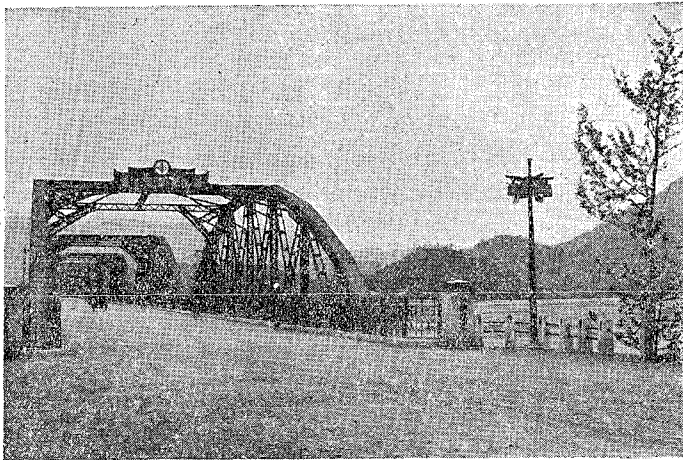
計畫では舊街道を捨て、新線を選ん

だ、古い情緒を無下に捨つることに

文句を附ける私でも此處の舊街道を

早く完成して清靜兩地を

續けたいものだが、路面を近代式に鋪裝するのを忘れてる



中

府

るのはどこ迄も靜岡式だ。

今頃に爲つて清靜間國道の改良に着手したと言つたところで、徳川氏の交通政策には到底及ばない家康がこゝ駿府に築城したときは清靜兩地の交通の爲に今の鷹匠町から清水湊に運河を開いて兩地の交通を測つて築城やら安倍川堤防築造の材料を運搬した賢智に較べたら霄壤の差だ、今も其運河は残されてゐて灌漑の便に役立つてゐるが、さぞや運河は今人の智恵の妙いのを笑つてゐるだらう。

焼津べにわが行きしかは駿河なるあべの市路にあへるこらはも、

狭ま苦しい街を通つて舊靜岡の町を出ると萬葉集に歌はれ



た安倍の町だ今は靜岡市に併呑されて終つた、安倍川、と

昔 往 の 府 中

聞くと馬琴の旅物語りにある遊女のことを想ひ出さずには居られない、彌次喜多の連中も金の苦面までして穀尻馬に乗つて安倍川二丁宿の女郎屋を素見してゐる、馬琴に筆を採らした程の女郎屋の在つたのも此處だが、今は移轉して跡形もない。たと昔から囃された安倍川餅、上戸黨の私達には餘り喰氣も起さないが、甘黨の爲に今も橋畔杉の木立ちの下にある小店で賣つてゐる位だから矢張り美味いのだらう。

安倍川には、立派な鐵筋混凝土のプレートガーダー橋が架けられてゐる、長さ二百七十間で有效幅が四間

何でも五十二萬五千圓の大金を掛けて大正十一年の三月に

起工し、十二年の七月に開通した想だ、之が木橋だつたら未だ新らしい木の香もすることだろうが、混凝土造で風流味は無い、が併し新橋が架る前までは木橋であつて、渡るとギシ／＼音がした想だ、口善惡ない連中は驚張りの橋だと野次つたものだ、夫れを想ふと風流味の贅澤は言はれない、橋の前後の道も架橋のときに改良して幅は五間半乃至八間に仕立てられ、勾配も最急のところでも三十分一位、盛土した所には石の柵を設け、路の側には三間置きに檜の竝木を植附けて、近代式の新装を凝してゐる、取り分け旅する私をして嬉しい氣持を起さしたのは、舊道にあつた老いた竝木を新道の中央に保存し、こゝを旅する人達に昔の氣分を味はして呉れることだ。

大昔、徳川時代より前は此處に川は無かつたらしい、駿河國志は「いにしへは安倍川の瀬は賤機山の際を流れて、府中城の後の方を通り横内の方に流れ、巴河の通りを江尻の海に入りしとなり。」と言つてゐるから此時代にはこゝに河は流れてゐなかつた、であるから徳川以前の東海道旅行

記は阿倍川のことを筆にしてゐないのも道理だ、徳川時代になつて後の岡部日記は、「國府をすぎて阿部川のこなたをさわりといふ、今年五月のころ、あべ川の上つ瀬に、水あふれ堤きれて、行きかひもたえにきときむさしまで音はやく聞えし所なり。」と言つて、洪水で人家は流され老いた者は子を失ひ、若い者は親を失つた慘事をつけて、治世の完いときにも此慘事のあることを嘆いてゐる位だから隨分此河も時に依つて氾濫し通行人を苦しめたことだろう、が併し「驛路の鈴」の筆者は安倍川が歩渡であつたことを録してゐるのを觀ると河には餘り水が無かつたやうでもある、併し庚子道の記やら岡部日記の筆者も安倍川を渡つたことを書いてはゐるが、どんな渡り方をやつたのか判らないシーボルトが江戸に參府したときは擔いて渡されてゐる。

川越の肩車にてわれ／＼を

深い所へひき廻したり。

例の彌次さん喜多さんは、態々深い所へつれられて、こゝう歌つてゐるから之も擔いて渡されたのだ、徳川時代の川

役覺書は渡錢高を定めて人夫賃やら籠籠代やら例の輦臺の事を書いてゐるから水のあつたことは確實だ、此處の行通も矢張り渡渉から漸次機械化されて發達したのであろう。

明治維新後は渡船に代つたが、七年になつていま内務省の土木局長宮崎通之助氏の祖先が、私財を投じ板橋を架け賃取橋を經營した、こゝで始めて橋の設備を見ることに爲つたのだ、今は橋詰に紀念碑を樹て、其の徳を賞へてゐる。

安倍川架橋碑

從二位勳一等公爵德川家達家額

安倍川橋在東海道舊津。宮崎君總五所架也駿之爲州負山臨海。水流激迅富士大井安倍三川其最者。承和中大政官命富士川造浮橋。大井安倍兩川添置渡舟。然漲涸無常。橋不流則舟膠。故亦頼人肩而涉之。德川幕府襲以爲例。行旅梗塞不顧也。及明治中與官改其法。水多則用舟少則架假橋。且定其渡價。勿得多取。君也任津東。亦嘗奉藩命理津務。以故頗熟水性。曰今之制便則便。然未爲盡。乃徵舊記詢識者。稟官投私財架板橋。凡閱歲而成。橋長二百八十間幅二

間名曰安倍川橋。而渡價減其半。行旅稱便。官賞君以銀杯三。是爲明治七年事。富士大井兩川亦踵倣之。而橫道諸水無不架橋者。是皆安倍川率先之功也然而每歲水出。雖不大壞未免修工。君嘆曰。如此不如改架十二年春復起工。擇良材鳩名匠。拮据經營數月而竣。以試之者十數年。雖遇洪水不復損壞。久遠之策於是乎立矣。又稟曰願缺之。自明年爲始。廢征行人之制。允之。乃捐未償費金八千五百圓。且缺其防水及修繕基金一千圓盡歸之於官。朝廷特賞以金杯三。實明治三十年也尋靜岡市及安倍郡民亦缺金一千五百圓以充修繕費。君聞知曰其志則可喜。然吾昔期獨力成事。今而煩衆人非素志也。亦請官自代納之。於是上下皆莫不稱其德矣。頃者有志者胥謀建碑于橋畔。記架橋顛末。以使後人有所考云

明治四十一年歲在戊申三月

從三位勳二等侯爵 黑田 長成 撰

正三位勳一等男爵 野村 素介 書

架橋の苦心も一通りでは無かつたらしい、昔からの國道

敷地迄を邸内に取込もうとする様な連中の多い、私利私慾に走る世の中に奉公的に架橋して呉れた宮崎氏の祖先に私は深甚の敬意を表したい、こゝを通る人々は碑前に少憩して故人の徳を懐ふて夫れを見習へば、難事と言はるゝ道路の改良も必ずしも難事では無からう、此紀念せなければならぬ橋も明治三十六年に至つて静岡縣營に移され、長さ二百八十間幅十尺五寸の木橋を架けたのを今の橋に改築したので。

○

新しい安倍川橋を渡ると、長田村の手越だ、今でこそ人家は海道に沿ふて點々軒を並べてゐるが夫れでも昔は手越驛と言はれて有名なものだった、が併し延喜式の宿驛では無かつたが、平家物語では治承四年十月十三日、大將軍平惟盛卿、駿河國手越驛に着き給ふ、と言つたり東鑑には、曆仁元年將軍頼家卿上洛の條に二月三日手越驛御泊、爲右京兆御沙汰、被レ儲御所。と録してゐるから此時代の宿驛であつたことは確かだ、鎌倉時代の旅日記、海道記でも亦建

治三年に旅した例の阿佛尼でも手越驛に泊つてゐる、徳川時代の旅人は餘り此處、手越驛のことを囃し立てゝるない、が享保年間に旅した庚子道の記では「丸子の宿のうしろの山に火の高くもゆれば、うちおどろかれて、あれは如何にと問へば、蘇のため焼くなりといふ、たゞ春の日にと思はるゝに風さへ吹けば、いと心もとなし。」と言つてゐる位だ、例の彌次さん喜多さんも、手越の里で俄雨に遭つて半合羽を取出して急いでゐるだけだ、そうすると徳川時代には正式の宿驛ではなかつて、今のやうに唯だ宿があつただつたらう、宿驛として認められたのは矢張り平安朝時代から鎌倉時代へかけてのことぢや、駿河國志は『手越は遊君の名所也、鎌倉殿の千壽の前、曾我五郎時宗が愛せし少將、皆此驛長の家より出たり。』と言つてゐるが、今は昔を偲ぶ面影もなければ美人らしい夫れも居ない。

飛ぶ鳥を落すやうな鎌倉殿の威力を以ても、今の世まで其の色香を残すことが出来ないとするや、人間の力も餘り頼むに足らないものだ、兎角の非難をもつ現世享樂の思想

も滿更理屈の無いものではないと、旅には餘計なことを考へて手越の人家を離れる、そこに左に折れる幅二間位の道がある、法律的に言へば府縣道大門用茶線だ、此道こそ東海道の古きを尋ねてゐる私の旅には見落してはならぬ、と言ふのは古代の東海道は之で無かつたかと言ふ氣持がするからだ、駿國雜誌には東海道の驛路のことを書いて、「村老傳云、往昔の街道は、まづ遠江國榛原郡初倉驛より海上を當國益頭郡小河郷今志田とすに着岸し日本坂益頭郡花澤村、天臺より時に至る半里余、越て一里計り登るを云也。一名朝鮮ヶ谷と號す、坂下を小坂村と云ふ、有頭益頭兩郡の境也云々此にかゝり大和田浦を過ぎて手越驛に出國府に到る也。」と言つてゐる、成る程初倉から海上を着陸したと言はれてゐる小河郷は、今の志田郡小川村のことで、延喜式に定められた駿河國小川驛のことだ、風土記にも、益頭郡小河、公穀二百七十二束三字田、假粟虫喰云々と言つてゐるから宿驛だつたことは慥かだ、詰り京師から東への旅路は初倉から今の燒津の濱に上陸して日本坂を越え、手越に出た此小路が東海道だつたのだ、併し夫れがいつの時代の東海

道であつたかを究めるのは随分困難ぢやが、古事記では日本武尊が燒遣ヤキハス—今の燒津で、かの嫉倭比賣命から貰はれた御囊の口を解いて火討を退けられたことを記してゐるから其の當時から延喜式が出来た延長年代迄の東海道と言つて間違ひ無いであらう、併し王朝時代の遊蕩兒在五中將業平が、宇津谷を伊勢物語に歌つたことからすると符合しないやうであるが、伊勢物語には延喜承平時代や天曆の頃の人の歌も載つてゐるから唯だ夫れだけで此道路が延喜式時代の東海道であることを否定することが出来ない、宇津谷に附隨的地位に在る丸子の宿が文治年代に出来たことから考へると私の説の正しいのを裏書きする、詰り此細道は古代から平安朝上期に於ける東海道だつたのぢやが、何分海路の旅は恐ろしかつたので宇津谷の道が開かれ夫れが官路に爲つたのだ。

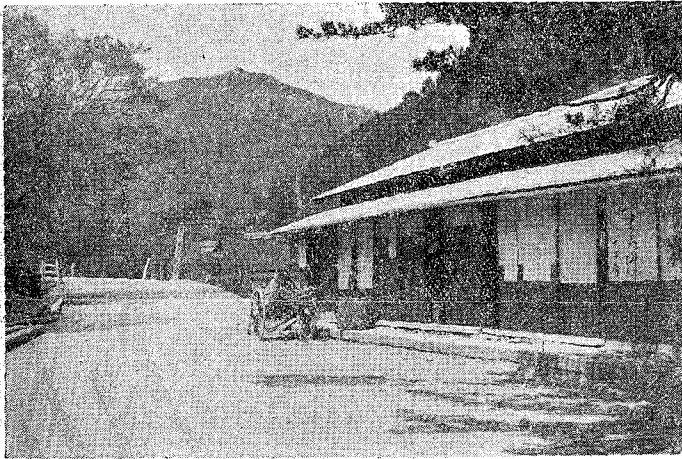
○丸 子

是から私の進んで行く東海道は平安朝以後の東海道だ、道は矢張り幅四間で平坦なものだが夫れでも前に宇津の谷

の峠を控えてゐる勢か、漸々に上り勾配に爲つてくる、そ

に忘れたものか旅人には離れなかつた言は、不運な宿驛

ここに長田村丸子がある、昔東海道五十三次の一つの宿驛だつた、今でも昔の驛家の舊態を留めてゐるが、連櫓の戸数は百に足らない半商半農の部落だ、宿驛であるが昔から東海道の旅人が餘り此處のことを言つてゐない、唯だ愛嬌者の彌次喜多がとろ、汗屋の夫婦喧嘩を見せつけられて「げんくわする夫婦は口をとからして、鳶とろ、にすべりこそすれ。」と詠んだ位で、多くの旅人は手越の里から宇津の山に素通りしてゐる、是と言ふのも業平の歌で名高くなつた宇津の谷が手近にあるので、夫れに心を誘はれて素通りしたのか、夫れとも宇津谷を筆する爲



鞠

子

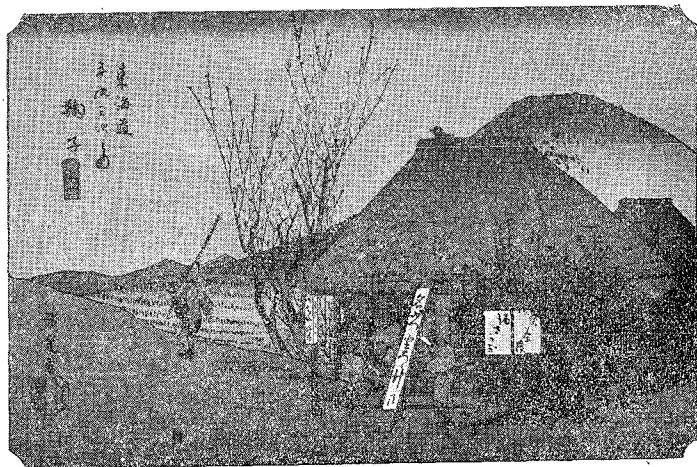
往

だ、調査が不十分であつた爲か知らないが、日本交通史論の著者藤田明君などは、「鞠子はもと手越驛と稱した所」なんて言つてゐる位だ、夫れ程輕視されてゐるが、東鑑には、文治五年十月五日、有_二手越平太家綱_一者_一征伐之間、侯_三御供_一、募_三其功_一、可_レ被_レ行_レ賞_レ之由言上、且賜_三駿河國麻利子一_一、召_三居浪人_一、建_三立驛家_一と言つてゐるから文治年間に設けられた驛だ、夫れを徳川が五十三驛の一つに指定したのだ、宗長の宇津山記では「丸子といふ里、家五六十軒京鎌倉の旅宿なるべし」とあるから今と違つて相當賑はつた驛だ。

世をいとふ心のおくや濁らまし

かゝる山邊のすまひならでは。

「驛路の鈴」の筆者が詠んだ、吐月峰柴屋寺、東海道より右小溪に沿つて五六町の處に在る、連歌師宗長法師が文明十八年建設したまゝの舊寺、室町時代の建築法に依つて建てられたと言はれてゐるが建物よりは庭園、庭園よりは西方天柱山を眺める方が私共に印象を深からしめる、今は東海道から此寺の前まで自動車で乗附けることが出来る、夫れも其の筈だ、附近に流行物ラヂウム温泉があつて、静岡藝者の隠れ家だとか、「心のおくや濁らまし」の歌も今は徒に古歌と爲つたのを悲しむ。



て、曹 洞山三里寺の邊より右の山根を傳ひ、葛の細道に入り

駿河なるうつの山邊の現にも

夢にも人に逢ぬなりけり。

昔、情人業平朝臣が東國下向のとき、宇津の谷峠で修業者に遭つて京に送つた文だ、唯だ夫れが因と爲つて宇津の谷の峠は貞觀以降、今日まで文人墨客の心を咬つたものだが、夫れは今の東海道とは違ふのだ、業平が。道は甚暗う細きに葛楓は茂り物心細く不覺なる眼を見る事と思ふに、と嘆いた細道は、いろ／＼に離立てられてゐるが、夫れの是否を證議するの暇のない私は駿國雜誌の記する所を拜借する。

岡部驛より丸子驛に到るの道法は八幡山の麓を通り岡部川を右に見

丸子の平橋に出る也。里人云。此蔦の細道は今の蔦の細道にはあらず、往昔は假宿を以て岡部驛とすれば、今の岡部驛の裏を過て宿頭西行山の邊りよりさし出たる山間の小道を蔦の細道とは云しならん。爰より宇津の山の峠を越へ宇津の谷村にかゝり、今の如く丸子驛に出たり。

名所方角抄の趣考ふべし。宗長法師の宇津の山の記にも、「十五日駿河藤枝鬼巖寺、十六日府中、折ふし夕立して宇津の山に雨やどり、此茶屋昔より名物十だんごと云、一杓子に十づゝかならずめらうなどにすくはせ興じて夜に入て着府。云々。」往古も今の道を通りしものか。今云、蔦の細道の坂下より入て、平橋に出れば宇津の谷村にはかゝらざる也。宇津谷、丸子山際にして、平地也。平橋の下よりは丸子の地にして、宇津の山とは此村の西坂より、地藏峠をかけ坂下までの稱にして、坂下より岡部驛までを廣く蔦の細道と云しにや。天正十八年三月十九日、豊臣秀吉公相州小田原の北條氏政を征伐として下向の時、岡部驛をすぎ宇津の谷峠を越へ、間道の山路を騎玉ふと云は即今

の往來にして、此頃までは山中の間道也。秀吉公深慮ありて本道を除け玉ふ。云々。爰に間道とあるは蔦の細道なり又云。今の海道は即往古の官道ならん。

併し源光行の海道記は、鎌倉時代に於ける此山の状況を詳しく書いて、「此山は山中に山を愛するたくみのけずりなせる山なり、碧岸の下に砂なかうして巖をたて、翠嶺の上に葉おちて壤をつく、肱を背におひ、面を胸にいだきて漸にのほれば、汗肩祖のはだへに流れて云々、」と言つてゐる、親行の東關紀行でも、宇津の山を越ゆれば蔦楓は茂りて昔の跡絶えず、と録してゐるから鎌倉前半期の東海道は業平時代と同じ道で同じ有様であつたのに違ひない、夫れに爲家集の「東へ下りける路にて」では、「又見れば昔に變る宇津の山蔦も楓もそれとしもなし。」と歌つたり爲相卿踏次記にも「聞置きし昔には似ぬ宇津の山眞葛や葛に生變るらし。」と言つてゐるから此時代には既に道も變つてたのか夫れとも沿道状況が變つたのか判らないが、鎌倉前半期時代とは同一では無かつたらしい、秀吉が通つたのが間道

であるなら、夫れは鳶の細道で其の時分には本道が出来てゐたのだ、そうすれば今言ひ囃されてゐる鳶の細道は平安朝の初期から足利時代までの官道であつたのだ。

徳川時代の旅人は、業平の昔にこと附けて、修行者や山法師を聯想し「文ことづけて」杯と旅の心を慰めてゐる、飯家日記の女主人公が「古郷のおやの夢にやかよふらん今日こそかゝるうつの山みち。」と詠んだのは女らしい、岡部日記は、私の言つたやうに「うつの山はいとさかしかれど、むかしの道にあらずといふぞ口おしきや」と言つて昔の道が變つてゐることを言つてゐる。

今、村人の言つてゐる鳶の細道は、宇津谷村の入口にある平橋の傍に溪流に沿つてある幅三尺位の呷道だ、鯉田の間を縫ふて行くこと一町程で直ぐ山に入つてゐる、青年團の手に依つて細道の指導標が建てられ寔に結構な奉仕と感服したが、紙文で鳶の細道を想像した私共をして「何だ人を馬鹿にしてゐる」と言つた感を起さずには居られない、東海道を尋ねる私でも一寸覗いた位で、餘程の物數奇でな

ければ通らないだらう、業平さんがお休みになつたと言ふ、猫石や延命地藏やは業平を對照として始めて面白いのだ、昭和の業平でもない私は細道に敬意を表して今の東海道を尋ねる。

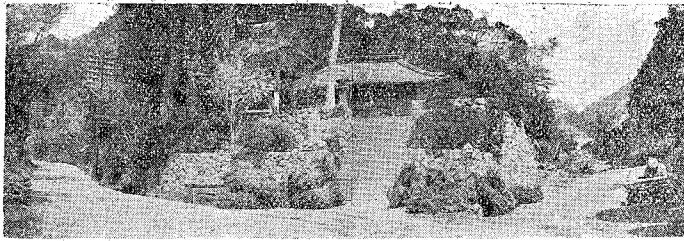
○ 降しきる雨や霞の十だんご

ころけて腰をうつの山道。

彌次喜多が洒落てる十團子、今は之を賣る家もない、老婆の話では盂蘭盆のときに造るだけだ相だ、お願とならば此盆に拵へたのを差し上げやうと言つて呉れたのは、鼻蕪大の團子が一連に十づゝ始末されてゐるだけのものだ、子供の癩癩になるからと言つて代金を要求するところは遺は海道商人だ。

宇津の谷の部落に入ると、石疊階段式の幅一間か一間半位の東海道が残され、之に代つて新道が拵へられてゐるが、夫れでも急勾配に屈曲が多いから通行は困難だ併し貨物自動車は相當に通つてゐるのは何となく心嬉しい、峠の

頂上は百三十間位の隧道だが幅員は狭い、路面は凹凸で足



て平坦な立派な道だ。

岡 部

馬を履いては通れない道だ、雨も降らないの上からは水が漏つて来る、宮尾しげを君などは「われは又爰をせにせん宇津の山、わきて色ある隧道の下露」と擲擻つてゐる位に悪い、之を擴張するのには新たに一つの隧道を堀らなければならぬ、そうすれば今のを廢止して新隧道を成るべく低く堀るのが得策だと言ふことに爲つて、改良計畫が進められてゐる、難路も茲二三年で改良されるだらう、坂下では徳川時代の舊海道と合し

今と昔とは海道は違ふにしても矢張り宇津の谷峠は難路だ、歩いて通つた飯家日記の女主人公は「古郷のおやの夢にやかよふらん今日こそかゝるうつの山みち」と詠んで峠の交通に恐怖の念を起してゐるやうだ、之が馬で通つた武女の庚子道の記では肥えた法師に遭つて「常に精進物のあしきをくふとは見えざりけり、彼にそゝるなる文などことづけたらば、物ゆかしかりて、己れまづ開きても見るらむとおもひやるも罪ふかしや」と恐怖どころか修行者を擲擻してゐる、旅駕で通つた曲亭馬琴は「旅駕にのればつづりうつの山うつゝにも目のあはぬなりけり。」と詠んで夫々の感想を表してゐるが、今、自動車で通るのにも交通の危険感を頭から去らしむることが出来ない、岡部近くに爲つて始めて國道を通つてゐる心持になる。

これぞこのたのむ木のもと岡部なる
松の嵐よ心して吹け。

仁治年間に源光行が旅したときも、こう歌つて「岡部の

今宿をうち過ぐる程、片山の松の蔭に立ち寄りて、餉など

移し後今の處に移す。天正年中當驛を廢して、藤枝驛より

取り出てたるに、嵐冷しく梢に響きわたりて、夏のまゝなる旅衣、

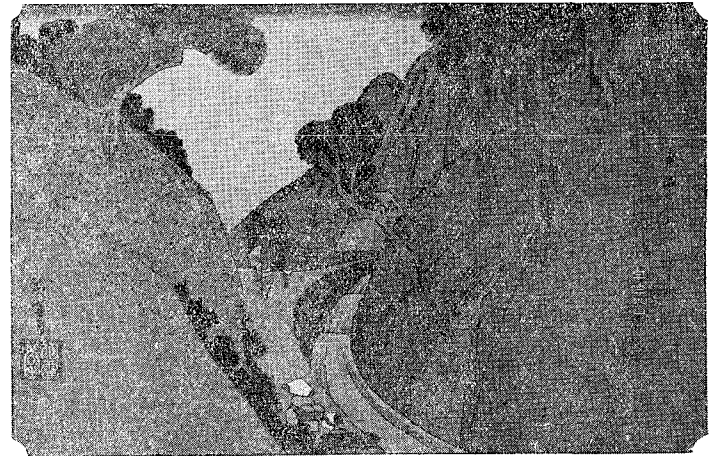
丸子驛に到るを順とし其後又當驛を建てらる云々。」と言つてゐるから今の東

うすき袂も寒く覺ゆ」と東關紀行に物語つた、今も尙夫れと同じやうに此處の竝木は立派なものだ。

海道からラミットされてゐる廣幡村假宿が、徳川以前の宿驛だつたのだ。

宿驛、岡部、餘りたいた町ではない、戸數二百と言つた位で漸く町を維持してゐる位のものだ、夫れもその筈で東には静岡、西には藤枝を控へ鐵道東海道線が敷かれても、こゝ岡部には寄つて呉れなかつた、其のお蔭で今は衰微するばかりだ。

風土記にも昔のことは表はれてゐないが、駿國雜志では「傳云。



當驛は三度變れり、始め假宿河原にあり中頃八幡山の麓に

の方だが此道も東海道として役立つた事もあるのだらう。

往 昔 の 岡 部

今の東海道は鬼島や水守を通つて藤枝に出てるが、假宿が岡部と呼ばれて宿驛であつた頃の東海道は、北方高田村の部落を通つて、葉梨村中の郷の臥猪坂を越えて岩田山の東麓を藤枝町の上傳馬町に出たものだ併し夫れは徳川以前のことだ、夫れに享和年間に旅した彌次喜多は、朝比奈川を渡つて八幡鬼島を過ぎ白子町で休んで、茶屋の女を擲掄ひながら平島口や田中を通つて藤枝に出てる、今の海道よりは南